伝説の匠

―第五五回

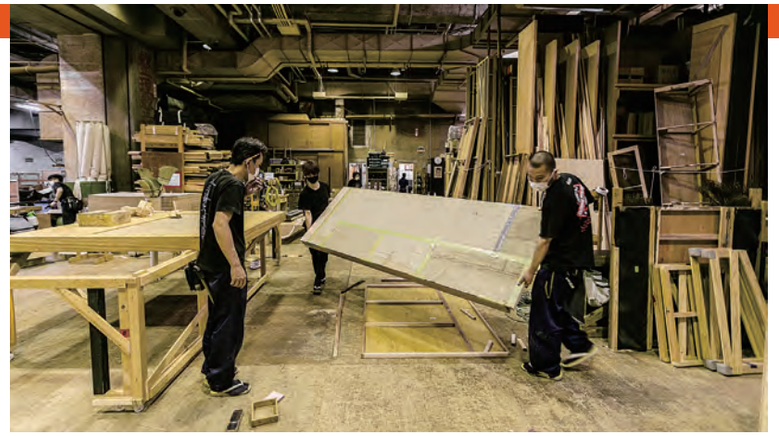
大道具製作

劇場の奈落で、黙々と作業をする。木材を採寸し、裁断し、組み立て、運ぶ…。地道な作業とスピードが求められる大道具製作。伝統芸能を支える、文字通りの「舞台裏」に迫った。

宮崎 朋也

1973年、東京都出身。金井大道具株式会社製作グループ・国立劇場勤務。日本各地をはじめニューヨークやドイツなどの海外公演にも同行し、製作現場の中核として活躍する。

スピードと安全性を両立し伝統芸能の舞台をつくる



「平台」（右ページ写真）もいろいろな長さがあり、2倍の長さがあるものは、二人がかりで運ぶ

「昔と違い、今はどんなことを質問されても怒鳴ることはありません（笑）。後輩には遠慮せずにグイグイ来てほしいですね。やる気を見せてくれるとかわいいな、と思います」

重さ十キロの畳サイズの平台（舞台に敷く台）を軽々と肩に乗せ、移動させる。前腕部の太さから、Tシャツに覆われている上半身の筋肉が容易に想像できる。「日々の筋トレは欠かせません」と笑うのは、舞台大道具製作に携わる宮崎朋也さん、この道二八年のベテランだ。所属する金井大道具株式会社は、江戸三座のひとつ市村座の劇場付きの会社として明治十九年（一八八六）に創業した。現在は様々な劇場で舞台大道具を手掛け、テレビ、イベント、展示会などにおける美術製作の仕事も請け負っている。

宮崎さんは二〇歳で入社して以来、国立劇場地下にある製作場に勤めてきた。「音響芸術の専門学校に入学したのですが、当時は就職氷河期で就活は散々。そんな時、校内のパソコンで偶然、金井大道具の求人票を見つけました。子どもの頃『8時だョ！ 全員集合』のセットに興味を持ったのを思い出し、大道具の仕事は楽しそうだなと」。入社後、配属されたのは歌舞伎の大道具製作現場。「当時は目の回る忙しさで、おっかない先輩がたくさんいました。それまで鋸（のこぎり）や金槌もろくに握ったことはなかったのですが、質問したら『うるせえ！』と怒鳴られるので見て覚えるしかありませんでしたね」

公演に間に合わせるために、納期は厳守。詳細がなかなか決まらず、製作サイドに仕様書が回ってくるのが公演の半月前ということもざらだ。「スピード勝負の一方で、役者さんが歩いたり触れたりするものですから、安全性には細心の注意を払わなければなりません。役者さんの年齢に応じて階段の段差や坂道の傾斜を調整することもあります」と宮崎さん。

軸傾斜丸鋸盤で木材を裁断する。指を切ったり腰を痛めたりと、ケガがつきものの現場では、集中力が求められる

体力勝負の仕事がきつく、何度やめようと思ったかわからなかったと話す。それでも続けてこられたのは「結局、この仕事が好きなんでしょうね。地方や海外の公演にも同行し、役者さんとも親しくさせていただいております。幕が開いて、自分が作った〝大道具〟が役者さんの〝舞台〟になった瞬間、それまでの疲れが吹き飛びます」と目を輝かせた。

月刊『江戸楽』2021年8月号より